

反抗の兆し

西澤忠志

- 講読箇所

岩波新書 pp.93-104 (改版 pp.105-118)

- 概要

本章は、「空白五年」と呼ばれる府立一中在学時代の中でも、その卒業間際の時期（1931-32年頃）を取り上げる。前章（「美竹町の家」）では家庭、前々章（「空白五年」）では学校が取り上げられていたが、本章は映画や文芸の世界との出会いが中心となっている。この時期の加藤は、いくつかの出会いを通じて、後に加藤が評論の対象として取り上げることとなる、映画と文学への興味を持ち始めた。具体的には、祖父を通じた映画との出会い、父の書齋を通じた『万葉集』との出会い、幼友だちの娘を通じた芥川龍之介との出会い、そして追分での立原道造との出会いである。これらの出会いは映画と文学の世界へ加藤を導くものであるとともに、加藤が抱いていた不満に対する反抗の手段を得ることにもつながった。この反抗の手段が活かされたのが、父との関係の変化と追分での「文学少年」との出会いである。これらの出会いを通じて得た反抗の手段は、「空白五年」と呼ばれた期間を終わらせるだけでなく、後の戦時中の加藤周一の態度、ひいては世間に対する態度にもつながるものとなった。

- トピックス

①反抗とは何か？

②何に対する反抗なのか？

- 凡例

下線、ゴシック体は発表者によるもの。特に、ゴシック体は二項対立に関わる部分である。

e.g., =例 c.f.=参照 (……) =省略

∴=ゆえに ∴=なぜなら

映画体験

私の両親は、子供がひとりで活動写真を見に行くことを、かたく禁じていたが、(……) 私が活動写真を見るようになったのは、渋谷の祖父のおかげである。(……) 見物する写真は、「西洋もの」で、日本製の活動写真へ案内されたことは一度もないが、その理由は今考えてみてもよくわからない。おそらく祖父は活動写真に異国の風俗の影をもとめ、昔若かったときにそこで味った快樂を思い出していたのであろう。香水の匂、葡萄酒の味、女の髪の肌触り、折ふしの人々の表情と言葉の抑揚……そういうものの全体は、東京での身の廻りに意に任せぬことが多くなるにつれて、いよいよ忘れ難く貴重なものに思われ、暗闇のなかにめまぐるしく動く光と影にさえも、他人にはわからぬ意味を見出していたのであろう。私たちは話のすじに夢中になり、かたずを呑んで画面を見まもっていたが、祖父は途中で立ちあがり、「もうよかろう」ということが多かった。すじがどう発展しようと、そんなことはどうでもよかったのである。(pp.93-94 改版 pp.105-106)

● 祖父、増田熊六 (1866-1939) と映画

- ・資産をもとに、イタリアへ私費留学 (1891~93)
- ・陸軍退役の後、貿易商へ転身
- ・しかし、関東大震災以降、事業に陰りが出始める

e.g., 明大丸事件…船が遅れたことに対して賠償を求められる¹

・増田熊六の映画体験

うまくいかない現実⇔過去の追憶 (洋画鑑賞)

→話の筋ではなく、過去に体験した洋行の思い出を想起する



増田熊六肖像写真
加藤周一文庫所蔵

¹ (川瀬, 松尾 1925, 194-320)

いわゆるトーキーの現れるまえの渋谷の活動写真館には、小さな楽隊が備えられていて、画面の進展に応じ、しかるべき曲を奏した。(……) 能や歌舞伎の音楽が、もっと洗練された形で昔からやっていたことを(……) 渋谷の活動写真館の楽隊は、当世風に、いくらか粗雑な形で、実行していたのである。また西洋の風俗に疎い観客にも、画面の状況がわかり易くなるように、念には念を入れて、「活弁」という解説者もいた。(……) 往年の「活弁」は、その解説のし方を見事に様式化していたという点で、今日の放送局の解説者よりも、はるかに独創的であった。狂言では、登場人物が、しばしば、主人と太郎冠者、次郎冠者の三人に整理されている。「活弁」は西洋の活劇の登場人物をそれぞれちがう名まえで称ぶ代りに、女主人公をすべて「メリー」、善玉の男を「ジョージ」、悪玉を「ジャック」という風に、整理して称んでいた。(……) 私はそういう活劇をたのしんだが、その善幸悪玉の二元論から倫理上の、または世界観上の影響を受けたことはない。影響を受けるためには、私が渋谷の活動写真館へ行くことはあまりに少なすぎたし、また後になって多くの西部活劇を見るようになったときには、もはやあまりに年をとりすぎていた。正義人道についての私の考えは、活動写真に養われたのではない。しかしいくらか後になって、正義人道とは関係のない世界を発見するために、祖父と共にみた活動写真の役割は小さくなかった。(……) そういう話のすじは、むしろ、歐洲のどんな都会の、どんな社会の現実ともほとんど全く関係がないものであったろう。しかし中学生の私にとって歐洲は限りなく遠かったので、それは少しも気にならないことであった。(……) 子供のときに原田三夫の通俗科学によって養われていた私は、中学生になってから、東和商事のおとぎ話によって養われるようになった。

おとぎ話の世界には、あらゆる事が起った。恋があり、野心があり、裏切りがあり、決定的な出会いと決定的な別離があった。しかし渋谷美竹町の家と平河町の中学校との間を、毎日市電で往復していた私の現実の世界には、全く何事も起らなかった。(……) 私はただ中学校しか知らず、その中学校と私自身にうんざりしていた。活動写真館が私に教えたのは、暗闇のなかで想像の世界へ逃れるということである。

(pp.94-96 改版 pp.106-109)

1 昭和戦前期の活動写真(映画)と学生

1.1 昭和戦前期の活動写真(映画)と学生

・1920年代の教育界…映画が児童に悪影響を与えることを懸念する議論

∴教育上よろしくない映画を小中学生に見せまいとする傾向が進む

戦前では、小中学生が映画館に行くことを禁止あるいは父兄同伴とする制限は一般的²

² (佐藤 1996, 321-323)

1.2 学生は何に魅了されたのか

- 弁士の芸（日本映画、洋画に関わらない要素）

e.g., 丸山眞男の回想…弁士の芸と映画が結びつく

『カリガリ博士』などは、夢声の説明と離れてはぼくのなかにはないんだね。というのが説明っていうのが（……）本当に画面と合ったりリアルなセリフでしゃべるやり方をはじめた。（……）令嬢の寝室まで忍び入って、短刀を振りあげる。そこまでの間、夢声は、（……）聞こえるか聞こえないかの声で、ずっとしゃべっている。そうして短刀を振りあげ、令嬢が目をさましたところで、（……）夢声の「人殺しい！」っていう絶叫が館内にひびきわたる。（……）表現派の手法もすごく新しかったけれど、夢声の説明がまたそれとピッタリ合って実際、斬新だった³

- 「西洋の窓」としての洋画…西洋文化に触れるきっかけとしての洋画

e.g., 中村眞一郎

当時の私たちにとっては、映画は（……）精神生活にとっての必需品であった。（……）西欧芸術との感覚的な同時性を私たちの世代に獲得させてくれた⁴。

- 潤いとしての洋画…平和や文化を充たすものとしての洋画

e.g., 山崎剛太郎

1930年代はフランス映画の黄金時代を日本でも忠実に反映して、名作が行き着く暇もなく次々と輸入公開され、中国に、満州に、遠くはヨーロッパにも戦雲が重くのしかかるとき、平和を求め、文化の香りに渴いている人たちにどれほどの潤いを洗えてくれたことか⁵。

1.3 加藤周一の映画（洋画）体験

中学時代の加藤の映画（洋画）体験…『巴里祭』⁶、『会議は踊る』⁷、『未完成交響楽』⁸、『三文オペラ』⁹

∴祖父が連れていってくれるもののみ¹⁰（自分で観に行くようになるのは高校生以後）

→増田熊六をきっかけとした映画体験

³ （丸山、埴谷 2000）

⁴ （中村 1969, 29-30）

⁵ （山崎 2003, 4）

⁶ 監督ルネ・クレール、原題 *Quatorze Juillet*、日本公開年 1933 年

⁷ 監督エリック・シャレル、原題 *Der Kongreß tanzt*、日本公開年 1934 年

⁸ 監督ウィリー・フォルスト、原題 *Leise flehen meine Lieder*、日本公開年 1935 年

⁹ 監督ゲオルク・W・パプスト、原題 *Die Dreigroschenoper*、日本公開年 1931 年

¹⁰ （加藤 2011, 173）

- 中学時代の加藤の映画（洋画）体験の意味
 - ・「西洋の窓」としての洋画…「海外旅行の代用品¹¹」
 - 現実世界では体験できない世界を体験させる媒体
 - 「正義人道とは関係のない世界を発見」＝「想像の世界」へ
 - 想像力を鍛える結果になる¹²
 - 加藤の映画評論の特徴：「映画の背後にある現代社会や日本文化のはらむ問題が透視され、それに批判的考察がなされること¹³」へ

- 現実からの逃避先としての洋画
 - 現実と遠く離れている（フィクションの世界）だから
 - ∴現実（＝「空白五年」）⇔映画の世界（＝フィクションの世界）
 - ※しかし、加藤にとって活弁と映画館付の楽隊は、能、歌舞伎、狂言との共通性があるという点（登場人物の様式化）において興味のある対象でしかない

¹¹ （加藤 2011, 174）

¹² （鷲巣 2018, 174）

¹³ （立命館大学加藤周一現代思想研究センター 2020, 28）

文学との出会い

しかしただひとり想像の世界にあそぶためには、活動写真だけが唯一の手段ではなかった。(……) 私は日本の文芸を「万葉集」から読みはじめたけれども、それは私自身の見識によるのではない。中学生の私は想像の世界を必要とし、そのために絶えず活動写真を見物しているわけにもゆかなかったので、文芸の世界にちかづかざるをえず、文芸の書は、幸にして——当時の私にとっては不幸にして——「万葉集」以外にはほとんど何も手もとになかったということにすぎない。しかしいわばやむをえずして読んだ「万葉集」は、私に想像の世界をひらいてくれた以上に——その意味では人麿も憶良も、ルネ・クレールやG・W・パブストにはるかに及ばなかった——言葉による表現の世界を啓示してくれた。「万葉集」の言葉は、それまでに私の読んでいた日本語とは、大いにちがっていて、註釈によらなければ、しばしば意味を想像することもできなかった。私ははじめて、意味から切り離された言葉を見たし、言葉の、意味とは別の性質や、その性質が示唆する可能性を意識した。「近江の海夕なみ千鳥汝がなけば……」私は「万葉集」の音楽とでもいうべきもの、詩的な文芸の微妙な性質とそのいうべからざる魅力を、発見しようとしていた。「万葉集」のいくつかの短歌を覚えたのは、そのときである。これらの歌は私の一部分になった。私は同じ頃に藤村や晩翠の詩集も読んだ。しかし彼らの言葉は、詩的言語についての決定的な経験をあたえるためには、あまりに日常使い慣れた言葉に近すぎた。

(……) 私は詩とは何かを考えるときに、藤村・晩翠を考えず、またいかなる外国の詩人のことも考えず、まず何よりも「万葉」の歌人たちを想いうかべる。私にとって「詩」という言葉に意味が生じたのは、美竹町の家の一階で、「万葉集」と共にすごした数限りない夕暮の時間があつたからである。しかし「万葉集」の世界は、まさにルネ・クレールやG・W・パブストの世界と同じように、退屈で耐え難い私の現実から無限に遠く離れていた。その退屈、その耐え難さ、私自身に対するやり切れなさの由来と意味を、解きあかきぬまでも、それとの関連において私に語りかけてきた最初の文芸家は、芥川竜之介である。(pp.96-98 改版 pp.109-111)

2 加藤周一と『万葉集』との出会い

∴現実に対する不満から、想像の世界を必要としたから

→父の書棚で佐佐木信綱、芳賀矢一校注『万葉集略解』と出会う

2.1 加藤の『万葉集』理解

- 「言葉による表現の世界」 = 「万葉集」の音楽とでもいうべきもの
= 韻律を発見する

※音に対する鋭い感性…「病身」でも触れられている

e.g., 柿本人麻呂「近江の海夕なみ千鳥汝がなければ心もしのに古思ほゆ」
Ouminomi/Yuunami/Chidori/Naganakeba/Kokoromoshinoni/Inishieomooyu

- 母音による韻律への注目¹⁴…『日本文学史序説』の『万葉集』理解へ
母音 i を繰り返す前半と母音 a を主とする中間部、母音 o の響く後半をつないで、絶妙の効果をつくり出した¹⁵。

2.2 加藤の『万葉集』理解の独自性

- 戦前の『万葉集』理解：物語として理解する
e.g., 『万葉集』の位置づけ：〈忠君愛国〉の意志の固い「臣民」のアンソロジー¹⁶
∴国語教科書の中で防人歌が取り上げられる
〈秀歌〉の存在を「優美にして高雅」な現代の「國民性」の問題にすり替える
e.g., 「淡海の海夕波千鳥汝が鳴けば情もしのに古思ほゆ」への解釈
その古とは大津宮の盛なりし時の事なるべく、言約かなれど懐古の情、言外にあふれた
り。よき歌といふべし（山田 1943, 134）。
- 加藤の『万葉集』理解との比較
→物語を見出すのではなく、より感覚的で作為的な韻への注目という点で独自の
マチネ・ポエティックの韻律詩へ
「自然への屈服ではなく、宇宙の創造¹⁷」としての詩
「音楽」という「意味から切り離された言葉」
人工の厳格な韻律詩による、日本語の押韻と形而上学的な世界との交感の方法へ¹⁸
→特殊性（物語）⇔普遍性（音韻）

¹⁴ 和歌の母音を中心とする音韻への注目は、加藤以前にも九鬼周造によってなされている。加藤はこの点にも言及し、日本語詩の押韻の可能性を説明した本として評価している（名木橋 2012, 276）。

¹⁵ （加藤 1999, 89）

¹⁶ （梶川 2018, 8）

¹⁷ （無署名 1948, 12）

¹⁸ （名木橋 2012, 278）

芥川龍之介の文章との出会い

私はかつて自殺を考えたことはなかったが、芥川龍之介の文章に感動した。小学校以来の幼友だちであった娘は、その頃女学校に通っていて、小説を沢山読んでいた。「馬鹿ねえ、芥川を読んだことがないの」と彼女はいった、「貸してあげるから、読んでごらんさいよ、あなたに向くかどうかわからないけれど」。私はその短篇小説にも感心したが、それ以上に「侏儒の言葉」におどろいた。「軍人は小児に似ている……」と芥川が書いたのは一九二〇年代である。しかし私はそれを三〇年代の半ばに、同時代人の言葉として読んだのである。学校でも、家庭でも、世間でも、それまで神聖とされていた価値のすべてが、眼のまえで、芥川の一撃のもとに忽ち崩れおちた。それまでの英雄はただの人間に変わり、愛国心は利己主義に、絶対服従は無責任に、美德は臆病か無知に変わった。私は同じ社会現象に、新聞や中学校や世間の全体がほどこしていた解釈とは、全く反対の解釈をほどこすことができるという可能性に、眼をみはり、よろこびのあまりほとんど手の舞い足の踏むところを知らなかった。遂に渋谷の古本屋で芥川全集十巻をもとめ、耽読して倦まず、そこに引用されている無数の文芸家の名まえまで、ほとんどみな覚えてしまった。(……) (pp.98-99 改版 pp.111-112)

3 加藤と芥川龍之介との出会い

- ・小学校以来の幼友だちであった娘(=山田千穂子¹⁹)から、短編集『夜来の花』を読むことを勧められる²⁰
- ・『侏儒の言葉』との出会い…芥川のアフォリズムに衝撃を覚える
- ・「軍人は小児に似ている……」=この部分の全文は以下の通り

軍人は小児に近いものである。英雄らしい身振を喜んだり、所謂光栄を好んだりするのは今更此処に云う必要はない。機械的訓練を貴んだり、動物的勇気を重んじたりするのも小学校にのみ見得る現象である。殺戮を何とも思わぬなどは一層小児と選ぶところはない。殊に小児と似ているのは喇叭や軍歌に鼓舞されれば、何の為に戦うかも問わず、欣然と敵に当ることである。

この故に軍人の誇りとするものは必ず小児の玩具に似ている。緋緘の鎧や鍬形の兜は成人の趣味にかなった者ではない。勲章も——わたしには実際不思議である。なぜ軍人は酒にも酔わずに、勲章を下げて歩かれるのであろう？²¹

¹⁹ (鷲巢 2018, 171)

²⁰ (加藤 2009, 212)

²¹ (芥川 1935, 67-68)

3.1 同時代の芥川評価

『侏儒の言葉』の衝撃…同時代評の手本

大体・生意気な十代の頃・『侏儒の言葉』によって芥川龍之介の崇拜者となった者が多い。私たちは中学校の教室で休み時間に、この箴言集のなかの幾つか、特にその反軍国主義的なものを挙げては、熱中して話し合ったものである（……）私たちはその警拔なアフォリズムによって、自分たちが生意気になるのを鼓舞されているような気がしていた。（……）そして芥川が大胆に軍人を揶揄したり、また学校で軍事教練を行うのを批判したりするのを読んでは、そこに正に現在の自分たちの問題が端的に自分たちの陣営に立って表明せられているのを発見し、大いに快哉を叫んだものだった²²。

3.2 芥川龍之介の加藤周一に対する影響および評価

● 加藤にとっての芥川の影響²³

- ・ アナトール・フランスを通じて、フランスの文化（特に文学と演劇）へ開眼
 - ・ 文学の道を志すきっかけ
 - ・ 文章を著すきっかけ
- ∴ 『青春ノート』（1937~1942）には小説や詩とともにアフォリズムが書かれている
後の時評で見せるアフォリズムへ？ e.g., 『真面目な冗談』、『夕陽妄語』

● 加藤の芥川評価

c.f. 文学研究者による芥川評価…小説家としての評価

近代自我の全体性を芸術を通して実現する 芸術主義と個人主義とを基調として展開された大正文学の代表的作家として、また、西欧的なものの広範な摂取のうえに近代短編小説の多様な可能性を実践した短編小説家として芥川の名は近代文学史のうえに特筆されるものである²⁴。

c.f. 同時代人による芥川からの評価

- ・ 堀一立原への始原としての芥川（日本文学での位置づけ）
- ∴ 生まれ（下町）との関係²⁵

²² （中村 1980, 50-51）

²³ （鷲巢 2018, 173）

²⁴ 海老井英次「芥川龍之介」『日本大百科全書（ニッポニカ）』

²⁵ （中村 1980, 9）

- ・カフカ、ボルヘス²⁶、ブレヒトの中心としての芥川（世界文学での位置づけ）²⁷
- ∴カフカ…生の不条理 芥川…『藪の中』
ボルヘス…物語の本質に「寓話性」を置く 芥川…寓話としての位置づけの『河童』
ブレヒト…（後述）

- ・加藤の芥川評価…「自身に対するやり切れなさの由来と意味を語りかける」
- ⇔「退屈で耐え難い私の現実から無限に遠く離れていた」映画や『万葉集』
「簡潔で味わい深い文章と、偶像破壊的な批判精神」を見出す²⁸
（それを実現させた要素…江戸以来の文人趣味、西洋志向の「大正教養主義」²⁹）
→「小説家」としての評価にとどまらない、評価
e.g., 芥川の著作に一貫する反軍国主義、反国家主義、自由主義³⁰
∴数年生きていたら検閲によって執筆不可能になり、地下へ潜入するか亡命するだろう³¹
※「小児」の部分は、1939年刊の文芸春秋社版では検閲により、削除されている³²
→日本のブレヒト³³の可能性としての芥川³⁴
∴亡命者としてのブレヒト 芥川…亡命者の可能性としての芥川
- ・芥川のアフォリズムを見出した、加藤によるアフォリズム（あるいは寓話的な時事評論）

²⁶ （1899—1986）アルゼンチンの詩人、作家。「世界史とはいくつかの隠喩の歴史である」という作者のことばからもうかがえるように、有限のなかに無限と反復の観念を持ち込み、独自の文学的宇宙を築き上げた。

木村榮一「ボルヘス」『日本大百科全書（ニッポニカ）』

²⁷ （中村 1995, 106-107）

²⁸ （加藤 2010, 159）

²⁹ （加藤 1999, 464-465）

³⁰ （ibid, 462）

³¹ （中村 1995, 108）

³² （芥川 1939, 15）

³³ （1898—1956）ドイツの劇作家、演出家。工場支配人の子として生まれる。医学生であったが劇場の仕事に転じる。24年ベルリンへ移り、そのころからマルクスを学ぶ。28年『三文オペラ』で大成功を収めた。33年、デンマークに亡命。35年には反ナチスの活動を推進。41年アメリカに亡命したが、第二次世界大戦後の47年、非米活動審査委員会の審問を受け、ヨーロッパへ脱出。48年東ドイツに戻る。56年ベルリンで死去。

八木浩「ブレヒト」『日本大百科全書（ニッポニカ）』

³⁴ （中村 1995, 108）

父への反抗

父は「つまらぬ小説」に凝っている息子に満足しなかった。そもそも文芸の閑事はいかに社会の役にたたぬものであるか、文士の道義は、漱石を例外として、いかに低級なものであるか、高等学校の入学試験をまえにして、小説を読むほど馬鹿げた時間の使い方はないではないか。——という父の義論は、しかし、もはや私を説得しなくなっていた。母は息子を弁護して、たとえ社会の役にたたないとしても、詩文の美しさというものがあり、父自身も「万葉集」に凝り、歌をつくったではないか、といった。またたとえ小説を読んでいても、高等学校の入学試験に通りさえすれば、側からあまり文句をいわない方がよいと思う、ともいった。私自身はといえば、すでに六年を原則とする小学校を五年にちぢめてみせたのだから、今また五年を原則とする中学校を四年にちぢめてみせる義理はない、と考えていた。(……) 試験の準備をしながら、折にふれて文芸の本を読み漁り、入学試験に確実に通るためには、父の考えるほどの時間を投じる必要はないのだ、と私は父に説明した。「しかしおまえは、小説を読んでいて失敗したではないか」「あれは運が悪かったからです」と私はいった。しかし父と私との間に生じようとしていた疎隔の原因は、入学試験そのものよりも、息子のなかに将来の科学者を期待していた父が、通俗科学に凝った小学生を歓迎し、文芸・小説の事にかぶれ出した中学生を歓迎しなかったということにあったのであろう。「万葉集」を読んでみずから歌作を試みながら、無神論者で、実証主義的なものの考え方に徹底していた父は、「文学青年」を軽蔑していたばかりでなく蛇蠍のように嫌っていたのである。私自身はそのときまだ、「文学青年」というものに出会ったことがなかった。(pp.99-100 改版 pp.112-114)

4 父(加藤信一)と母(加藤織子)の対立と加藤の立場

父…文芸は実用的でない、息子の将来への期待が裏切られたこと

母…詩文の美しさ、「実用的」でないはずの文芸に凝っていたではないか

父⇄母

³⁵ 特にブレヒトは「異化効果」を演劇に用いることで資本主義社会に対する変革を観客に促している。「異化効果」とは、日常見慣れているために、実は異常なことなのに自明のように見えてしまっている現象を際立たせ、この解決には現在の社会を変革する以外にないと観客自身が悟るに至る手法のことを言う。

岩淵達治「異化効果」『デジタル版 集英社世界文学大事典』

³⁶ 加藤はジョルダノー・ブルーノを題材にしたブレヒトの「異端者の外套」を翻訳している(『小さな花』所収)。それ以外に加藤がブレヒトに言及した評論は見つかっていないが、評論「嘘について」の中でブルーノについて触れている箇所がある。

加藤…いずれにも肩入れせず（あくまで二項対立に寄り過ぎない態度）

しかし父との疎隔の兆しを感じとっている

「疎隔の兆し」…幼稚ではない話を聞くことができたため喜んで父の話を聞いていた時期から、別の「幼稚でない世界」へ

しかし、父からの影響（合理主義的な発想）は捨てきれない³⁷

³⁷ （加藤 2011,256）

「文学少年」との出会い

私が生きて歩いている「文学青年」なるものをはじめて見たのは、中学生としての最後の夏に、信濃追分へ行ったときのことである。(……) 私たちは宿を、その頃中仙道の南側にあった脇本陣油屋にとった。(……) 土地の宿に泊る客は、ほとんど夏場の二カ月にかぎられ、しかもその客の大部分が、高等文官試験の準備をする大学生や、大学の入学試験を控えた高等学校の学生であった。(……) 私は幾人かの大学生たちを知るようになり、彼らから、同じ油屋に住んでいた詩人立原道造や「文学少年」——と法学部の学生たちがいくらか皮肉に名づけていた少年の噂もきいた。立原道造は建築の学生で、詩をつくり、堀辰雄に認められている。「文学少年」は、シェストフ全集を読んでいて、堀辰雄以外の大抵の文士は認めていない。——そういう噂話を聞きながら、私は、文芸についての私の知識が、大学生たちの会話のすじを辿るのにさえ、充分ではないということを感じた。(……) 私は見たことのない「文学少年」に劣等感をもったが、その「文学少年」を見る機会はすぐにやってきた。青白い顔をして、痩せ細った小柄な少年は、老人のように前ごみになり、ときどき咳をしながら街道を歩いていた。すれちがうときに、「ばかに元気がないじゃないか」と私の連れれの法学部の学生はいった、「あんまり苦吟しない方がいいよ、身体によくないぜ」。少年は急に顔をあげ大学生に向かって、聞えないほど低く口のなかで何かいったようであったが、私の方には見向きもしなかった。傍に人なきが如く——と私は思った。しかし父が「文学青年」という言葉で意味したろうものを、私が理解したのは、そのときではない。それを私が理解したのは、相手によっては傍に人なきが如く振舞う少年が、堀辰雄に対しては小使いのように振舞うのを見たときであり、堀辰雄を知った後の私に対してはその態度の全く変わるのを見たときである。また殊に肺結核で死ぬまえにその少年が書いた詩を見たときであるかもしれない。その詩のなかには、舌足らずの言葉で、砂糖菓子のように甘ったるい「神様」だの、「天使」だのという言葉が、沢山出てきた。それこそシェストフとどういう関係があるわけでもなかったし、基督教とどういう関係があるわけでもなかった。この「文学少年」が追分の宿で、法学部の学生を軽蔑していたのは、彼が高等文官試験の課題以上の何かを考えていたからでは決してなく、高等文官試験の準備にさえも不足な程度の知能のおかげで、砂糖菓子が民法よりも高等な何ものであると錯覚していたからにすぎない。それが父のいう「文学青年」にはかならなかつたのであろう。(pp.100-103 改版 pp.114-117)

5 軽井沢の中での加藤と文人たちとの出会い

5.1 戦前の追分、油屋、軽井沢

● 軽井沢について

- ・軽井沢に集落が形成されたのは、江戸初期中山道の宿駅となってから

- ・その中でも沓掛と追分は浅間山麓の三宿（軽井沢、沓掛、追分）としてにぎわった
- ・特に追分は、中山道と、新潟県へ抜ける北国街道との分岐点となり、栄えた
- ・しかし、新国道（現、18号）、信越本線開通とともに、宿駅の機能は衰退
- ・外国人宣教師、政界、財界、作家、画家らの別荘が建てられ、国際的避暑地として発展³⁸
- ・戦前の軽井沢…東京から離れた国際都市としての性格と、大学村としての非土俗性³⁹

5.2 加藤周一と「文学少年」（＝野村英夫⁴⁰）

● 「文学少年」＝野村英夫⁴¹

- ・「野村少年」…堀や立原など、追分の文学者から愛称として呼ばれる⁴²
- ・追分集った学生の野村評価…小児性と純粋性をその中に認める

e.g., 中村眞一郎

「野村少年」は、結核の療養のために追分村の油屋で暮している間に、同じ旅館を仕事部屋としていた堀さんと知り合い、その散歩のお伴をしたり、走り使いのようなこともしたりして、堀さんの生活のなかに入りこんだ。(……)しかし、堀さんの文学的弟子というわけではなかった。堀さんはあくまで、野村君を「少年扱い」していたのだった。その点、はじめから文学者志望の若者として近付いた私たち、私や福永とは異なっていた⁴³。

(その後、野村は中村や福永と喧嘩したが、戦後に中村の元へ行き小説の指導を仰いだことについて)

この野村君の、こだわりのない変心を、今日の私は一種の「小児性」ではないかと想像している。小学校の子供は、昨日、喧嘩をして別れても、今日また何のこだわりもなく、仲よく遊ぶものである。

私と不和になった時、私にその理由が全く判らなかつたのも、又、道造さんに退けられた時、野村君が全然気付かなかつたのも、通常の成人のあいだでは起りようがない現

³⁸ 小林寛義「軽井沢（町）」『日本大百科全書（ニッポニカ）』

³⁹ (中村 1988, 29-30)

⁴⁰ (猿渡 1979)、(中村 1988) など

⁴¹ (1917～1948) 詩人。東京生。東京府立第六中学校（現新宿高校）、早稲田第二高等学院文科を経て、早稲田大学法学部仏法科に入学。早稲田第二高等学院文科在学中の1936年に療養と東京外国語学校の再受験のために追分の油屋に滞在。同地で立原道造を知り、立原の紹介で堀辰雄との面識を得る。その後、堀辰雄が主催する『四季』の編集を中村眞一郎らとともに手伝いつつ、同紙に詩を投稿する。1943年にカトリック高円寺教会で受洗。1948年に結核で死去。享年31歳。(猿渡 1979)

⁴² (堀 1978, 301)

⁴³ (中村 1988, 118)

象である。彼の心理と行動とには、普通の大人の想像を超越する、小児独特の、そして持続性のない、一種の本能的な主観的な動機が働いていたのではなからうか。

そして、そうした小児性は、時として奇妙な純粹性を生み出すものである。何故なら、社会性の欠如によって、多くの現実的条件を無視してしまうからである⁴⁴。

● 加藤による野村批判のポイント

・相手によって態度を変えること

e.g., 加藤に対しては無視、堀に対しては小間使いのように働く

・言葉に裏付けがなく、表現が上滑りしていること

e.g., 「祈祷」『四季』66号(1942)

神様、若し私が、
静かな影と明るい歌とを
二つとも知つてをります優しい少女を、
恋してしまひましたなら、
私は本当に愛されるで御座みませうか。
優しい少女が静かな瞳で、
私を見て呉れます時に、
私は愛されてゐるやうに感じます⁴⁵。(……)

→キリスト教やシェストフ⁴⁶とはかかわりはない

加藤の「幼さ」への批判的視点（「空白五年」など）と共通

「星董派」批判へとつながる視点

「新しき星董派は小児病患者の芸術的思想的遊戯に過ぎない⁴⁷」

⇔知的にキリスト教、西洋文芸を理解しようとする加藤、中村の態度

e.g., キリスト教に対し、純粹に知的に新トマス派の研究を通して理解しようとする⁴⁸

⁴⁴ (ibid, 122)

⁴⁵ (猿渡 1979, 28)

⁴⁶ ロシアの哲学者、文芸評論家。あらゆる合理主義に対立、真理は理性を超えとし、実存主義に通ずる「絶望の哲学」を展開した。これらは1890年代以降ロシアで高まってきた反写実主義の傾向に合致し、象徴派によって愛読された。日本では1934年に刊行された『悲劇の哲学』が発端となり、知識人の間に一時激しい流行をみた。

沢崎洋子「シェストフ」『日本大百科全書(ニッポニカ)』

⁴⁷ (加藤 1946, 90)

⁴⁸ (中村 1988, 120)

立原道造との出会い

詩人立原道造とは、その夏、一度だけ話をしたことがある。ある日の午後、中仙道を沓掛の方へ向って散歩に出たとき、同じ方角へ向う長身瘦躯の青年があった。どちらからともなく話しかけ、ならんで歩いているうちに、「ぼく立原です」とその青年がいったのである。立原は歩きながら、すすきの穂をひき抜いて、それを手にもてあそんでいた。軽井沢の堀さんの家まで歩いてゆくつもりだといい、私が高等学校の理科を択ぶつもりか、文科を択ぶつもりか、などと訊いた。それから建築のことを喋り、詩のことを喋って、将来どうしてよいかわからないのだ、ともいった。私はそのとき立原道造の書いた詩を読んではいなかったが——従ってまだその魅力にとらわれてもいなかったが、彼の考えの明晰さに感心し、その人柄には、飾らない魅力があると思った。秋になって東京に帰った私は、油屋が焼けたということを知った。その火事の際に二階にひとりだけ住んでいた立原は、焼け死にそうになり、窓の格子を鋸で切り開いた消防手にやっと助け出されたという。その話を風の便りに聞いたときに、私はあらためて彼を思い出した。麦わら帽子をかぶり、中仙道の夏の午後の陽ざしのなかで、すすきの穂を弄んでいた青年と、そのしずかにしかしいつまでも語りやめなかった言葉の断片、また妙に強く印象にのこったその大きな眼を。その眼は、不安のために大きいのではなかった、しかし決して力に溢れていたのでもなく、野心に燃えていたのでもなく、ほとんど病的なほど繊細でほとんどおびえたように見ひらかれていた。翌年の夏再び私が追分村へ行つたときに、立原はもういなかった。(pp.103-104 改版 pp.117-118)

6 加藤周一と立原道造⁴⁹

6.1 加藤と立原の出会い

・「浅間山麓に位する芸術家コロニイの建築群⁵⁰」の話を聞き⁵¹、その考えの明晰さ、飾らない人柄に魅力を感じる

⁴⁹ 詩人。大正3年7月30日、東京生まれ。旧制一高を経て、1937年(昭和12)東京帝国大学建築科を卒業。初め前田夕暮主宰の『詩歌』に自由律短歌を発表したが、三好達治の四行詩に触発されて詩作に転じ、ついで堀辰雄、室生犀星に師事、津村信夫や丸山薫、リルケ、『新古今和歌集』などの詩風を摂取しながら、繊細な詩語を音楽的に構成した独自の十四行詩型(ソネット)を創出した。1934年、初めて信州追分に滞在、この地の風光を愛し、以後多くの詩の背景としている。堀辰雄らの『四季』の同人となり、『コギト』などにも作品を発表したが、昭和14年3月29日、結核性肋膜炎のため24歳で夭折した。飛高隆夫「日本大百科全書(ニッポニカ)」

⁵⁰ 追分一帯に文芸家、音楽家、美術家が創作と発表をしながら暮らす芸術家村の構想のこと。(種田 2018,4-6)

⁵¹ (加藤 2009, 22)

立原道造⇔「文学少年」

- 立原が自費出版した『暁と夕の詩』を、1939年に「藤澤正」名義で筆写⁵²
- 1937-8年の『青春ノートⅠ』にも「或る晴れた日に」を筆写⁵³

6.2 加藤は立原から何を受け取ったのか？

- 加藤と立原との共通性
 - ・音楽を愛したこと
 - ・建築に対する興味
 - ・詩の形式を取り入れる…立原：ソネット⁵⁴
加藤：アレクサンドラン⁵⁵
- 加藤による立原への印象…「決して力に溢れていたのでもなく、野心に燃えていたのでもなく、ほとんど病的なほど繊細でほとんどおびえたように見ひらかれていた」眼
：詩集の中まで浸透していた「死の影」⁵⁶
戦争が近づいていることか⁵⁷
 - ・しかし、1939年ごろの加藤は、立原の風貌については語ろうとはしない⁵⁸
その代りとして立原の「建築」を語ろうとしている
「建築」＝自身の立場を打ち立てること⁵⁹

その上で、立原の言う「血統⁶⁰の防衛」を、「芸術家が外部から離れて自己鍛錬すること」と

⁵² (石神井書林 2011, 1)

⁵³ 加藤周一「或る晴れた日に」『青春ノートⅠ』(https://trc-adeac.trc.co.jp/Html/ImageView/2671055100/2671055100200010/seishun_note1/?pagecode=42)

⁵⁴ 14行からなる代表的定型詩のこと。

⁵⁵ 加藤は『青春ノート』の中でアレクサンドランによる詩を試みている(半田 2019, 38)

⁵⁶ (加藤 2004, 322)

⁵⁷ 「立原道造の故郷」では、立原と話した時の「山の麓のさびしい村」では、「軍歌はまだ聞こえず、夕焼けの空に赤とんぼがしずかに舞っていた」(ibid., 323)と、軍歌(=戦争)と土地の静かな風景を対置させている。

⁵⁸ (加藤 1939, 173)

⁵⁹ (ibid, 183)

⁶⁰ 立原は晩年の1938年に「血統」という言葉を使って同時代の詩壇や俳句を論じている。この「血統」という言葉を立原は、日本国内において「以前」からの変革を試みる「以上」への流れの基盤と捉えている(名木橋 2012, 175)。しかし、「以上」を「より優れた日本」と設定した場合、「血統」は偉大な古典を持つ日本民族が世界から優越する証左としてとらえられてしまうこととなる。(ibid., 175)

して読み替えて、「防衛とは戦闘以外のものではあり得ない」ため、「城 (château)」と「その堅固さ」の由来となる「泉」を必要とする⁶¹

「城 (château)」の例…ショパンが肺結核の療養のためにマジョルカ島へ行き、『24 のプレリュード』を完成させたこと

∴「城 (château)」= 当時肺結核の療養地でもあった軽井沢を前提

→自身の態度を確立させたうえで、芸術家の「城 (château)」をつくることを肯定⁶²

「城 (château)」としての軽井沢、「マチネ・ポエティック」etc.

・立原の詩というよりも、態度や言葉からの影響を受けた？

e.g., 立原と「故郷」を共有した体験から

そして「故郷」と「異郷」との区別を消滅させるものとして「芸術家村」を置く⁶³

・「故郷」= 「人が帰って行くところ」

・「異郷」= 「人が行くところ」

→青春ノートでの「城 (château)」は、戦中の加藤が少数派のグループの中で戦争に流されまいとする態度を予期させる

まとめ

● 何に対する反抗か

・父権的権力

e.g., 父 etc.

・何の根拠もなく権力(権威)に媚びへつらう人

e.g., 「文学少年」

・今回の章での中心となる二項対立

父⇔母

「文学少年」⇔立原道造

→ある特定の政府に限らず、あらゆる権力、暴力による威圧、抑圧に対する反発へ⁶⁴

ある特定の価値に拘泥する教条主義を否定する「文化相対主義」的態度⁶⁵

⁶¹ (ibid, 184)

⁶² (ibid, 184)

⁶³ (加藤 2004, 323)

⁶⁴ (加藤 2011, 304)

⁶⁵ (鷲巣 2011, 346)

- どのように反抗⇔抵抗するか

『万葉集』、洋画①⇔芥川龍之介②

①態度による抵抗

e.g., 知的選良が積極的になすべきことではなかった活動写真、文芸の世界に浸ること（鷲巢 2018, 174）

→反抗の手段としての態度（ストライキ）

e.g., 戦時中の『万葉集』読解…主流の主張から離れた態度

知識人の戦争に対する態度⁶⁶

文学者による戦争への態度…『細雪』、『菜穂子』のように戦争に触れないこと⁶⁷

→「抵抗」としての国内亡命の可能性

そのために必要な条件…共同体の特殊な価値を超える普遍的価値へのコミットメント⁶⁸

②言葉による抵抗

e.g., 評論

→反抗の手段としての言葉への注目

言葉を創る（レトリック）を用いる

しかし、外面だけを見繕った言葉ではない「内容」のある言葉へどう昇華していくか

→超越的な普遍性との交感可能性⁶⁹を持つ根拠を示す

e.g., 伝統を意識しつつ、形式を自身に課すことで、その中で実現される「精神の自由」を実現しようとする態度…フランスの「抵抗の文学」⁷⁰

・二つの抵抗に共通する要素…超越的存在へとつながる「フィクション」、仲間を作ること

・加藤にとっての「フィクション」二項対照的な対立関係を解消するための方法

e.g., 「嘘」に対する加藤の考え…目的論的な思考、「嘘」の目的を分析する態度⁷¹

⁶⁶ 「林さん〔林達夫〕は「この国で日本語で書いても意味をなさないからいっさい沈黙を守る」ということを宣言して沈黙に入りました。それは立派だと思います。

というのは一人や二人で、あるいは大勢でも、ある時期からは反対して戦争をやめさせることはできなかつたんです。（……）林さんは何をしたかという、シェークスピアに出てくる草花を家の庭に植えて「シェークスピア・ガーデン」をつくったんです。それは道楽だけど、全体が皮肉になっています（加藤 2011, 39）」

⁶⁷ （加藤 2006, 226）

⁶⁸ （加藤 2008, 255）

⁶⁹ （名木橋 2012, 289）

⁷⁰ 加藤のアラゴンの分析に拠る。（加藤 1951, 66-75）

⁷¹ （海老坂 2020, 222）

詐欺師…当人の不当な利益を目的とした嘘⁷²

医者…患者の利益を目的とした嘘→当事者同士の関係を円滑にする（小説も同じ）

そして、圧倒的な暴力に対し決定的な勝敗を有耶無耶にする効果もある⁷³

→直接的な抵抗が出来ない弱者⁷⁴による「抵抗」に通じる

しかし、現実の判断が自らの嘘によって影響されることが最も危険でもある⁷⁵

それを防ぐために…「知的」な努力が必要

◎2通りの反抗の手段を手に入れた時期＝「反抗の兆し」の時期

※反抗の根拠（何故反抗するのか？）…「二二六事件」

参考文献

● 加藤周一に関わるもの

「立原道造論序」『ノートVI』（1940）鷲巢力，半田侑子 編『加藤周一青春ノート——1937-1942』人文書院（2019）

「立原道造論覚書」『ノートVI』（ca.1940）鷲巢力，半田侑子 編『加藤周一青春ノート——1937-1942』人文書院（2019）

「新しき星董派に就いて」『世代』1946年7月号（1946）[『加藤周一自選集 1』（2009）所収]

「解説」『夜来の花』新潮社（1949）[『加藤周一自選集 1』（2009）所収]

『抵抗の文学』岩波書店（1951）

「嘘の効用」『朝日新聞』（1988）[『加藤周一自選集 8』（2010）所収]

「『釣狐』または言葉と暴力の事」『朝日新聞』（1993）[『加藤周一自選集 8』（2010）所収]

『高原好日——20世紀の思い出から』筑摩書房（2009）

「芥川龍之介の想出」『芥川龍之介展』（1992）[『加藤周一著作集 18』（2010）所収]

「立原道造の故郷」『立原道造記念館』30号（2004）[『加藤周一著作集 18』（2010）所収]

『二十世紀の自画像』筑摩書房（2005）

『日本文学史序説』補講』かもがわ出版（2006）

「嘘について」『朝日新聞』（2000）[『加藤周一自選集 10』（2010）所収]

『日本文化における時間と空間』岩波書店（2008）

加藤周一、徐京植「教養に何が出来るか」『教養の再生のために——危機の時代の想像力』

⁷² （加藤 2010, 63）

⁷³ （ibid. 421）

⁷⁴ 加藤自身が幼少期に病気がちであったため小学生の時に「いじめ」にあったこと、それに対抗するために腕力の一番強い子供に接近したことも、こうした「反抗」の方法に関わるだろう（加藤 2011, 156）。

⁷⁵ （加藤 2000, 78）

影書房 (2005) [鷺巣力編 『「羊の歌」余聞』 (2011) 所収]
海老坂武「〈戦争文化〉への抵抗をめぐって」『加藤周一を21世紀に引き継ぐために——加藤周一生誕百年記念国際シンポジウム講演録』水声社 (2020)
鷺巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか——『羊の歌』を読みなおす』岩波書店 (2018)

● 映画に関わるもの

川瀬俊継, 松尾小三郎 編『日本海事仲裁判決例』海陸運輸時報社 (1925)
佐藤忠男『日本映画史 1』岩波書店 (1995)
中村眞一郎「川喜多夫人と金ボタンの青年」『東和の40年——1928-1968』(1969)
丸山眞男, 埴谷雄高「文学の世界と学問の世界」『思索的渴望の世界』(埴谷雄高全集 15) 講談社 (2000)
立命館大学加藤周一現代思想研究センター、東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センター『ヴァーチャル展示 我を人と成せし者は映画』(2020)
(<http://www.ritsumei.ac.jp/lib/pub/Event/92.pdf>)
山崎剛太郎『一秒四文字の決断——セリフから覗くフランス映画』春秋社 (2003)

● 万葉集に関わるもの

梶川信行「国語教科書の『万葉集』——佐佐木信綱をめぐる戦中・戦後」日本大学国文学会『語文』162号 1-15 (2018)
山田孝雄『万葉集講義 卷第三』宝文館 (1943)
無署名「詩の革命《マチネ・ポエティック》の定型詩について」『マチネ・ポエティック詩集』(1948) [『マチネ・ポエティック詩集』水声社 (2014) 所収]

● 芥川龍之介に関わるもの

芥川龍之介『芥川龍之介全集』5巻 (1935)
芥川龍之介『侏儒の言葉』文芸春秋社 (1939) (<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1172662>)
中村眞一郎『芥川 堀 立原の文学と生——ひとつの系譜』新潮社 (1980)
中村眞一郎『再読日本近代文学』集英社 (1995)

● 追分に関わるもの

石神井書林『石神井書林古書目録』85号 (2011)
猿渡重達『野村英夫——夭折のカトリック詩人』
種田元晴「立原道造がみた夢の続き——追分の芸術家コロニー」『追分流』2 (2018)
中村眞一郎『火の山の物語——わが回想の軽井沢』筑摩書房 (1988)
名木橋忠大『立原道造の詩学』双文社出版 (2012)
半田侑子「加藤周一「青春ノート」から見るマチネ・ポエティック」『感泣亭秋報』14号 (2019)

堀辰雄 「『野村英夫詩集』 跋」 中村眞一郎、福永武彦編 『堀辰雄全集 4』 筑摩書房（1980）

国土地理院 『地理院地図 / GSI Maps』

（<https://maps.gsi.go.jp/#14/36.334972/138.558540/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f0>）

信濃追分文化磁場油や 『油屋旅館と文化磁場油やの歴史』 (<https://aburaya-project.com/history/>)